ヤコブの手紙

～堀川寛による広島弁訳～

（*広島弁訳の意味*）（訳者の解説・蛇足）

第1章

神様と主イエス・キリスト様に仕えるヤコブが、散らばっとる十二部族のもんら（人たち／諸教会のクリスチャンのこと）に挨拶する。

わしの兄弟よ、試練におう（会う）たら、ブチ（とても）喜びんさい！信仰が試されたら、忍耐が生まれるのを、あんたら知っとろう。とにかく忍耐じゃ。そうすりゃあ、完全で欠けのない人間になれる。あんたらの中で、自分は知恵が足りん思うとるもんはおらんか？どんなもんにでも惜しみのう（なく）与えられる神様に願いんさい。そうすりゃあ、与えられる。針の先ほども疑わんと、信じて願いんさい。疑うやつは、風に吹かれて揺れ動く海の波みたいなもんじゃ。そがいなもんは、主から何かもらえる思うちゃあいけん。性根のすわらん、浮き草みたいな連中じゃ。

見下されとるもんは、（主にあって）高められとることを誇りんさい。富んどるもんは、いずれ貧しゅうなる。富んどるもんは野の草のように消えてゆく。日が昇り、熱風が吹き付けると、草は枯れ、花は散り、その美しさも失せる。富んどるもんもおんなじように、何も成し遂げずに消え失せる。

試練を耐え忍ぶもんは幸いじゃ。耐え抜いたあかつきには、神様を愛するもんに約束された、命の冠をいただくことになる。誘惑におう（会う）ても、「神様の誘惑じゃ」言うちゃあいけん。神様は、誘惑を受けることも、人を誘惑することもないお方なんじゃけえ。わしら人間は、自分の欲望に唆され、負けて誘惑に陥るんじゃ。欲望がはらむんで罪を生み、罪が熟して死が生まれる。

わしの大切な兄弟たち、誤解しちゃあいけん。あらゆる良い贈り物、完全な賜物は、上から、光の源である父から下される。御父は、変わることも影になることもない。御父は、ご意志のままに、真理の言葉によってわしらを生んで下さった。わしらを、万物の初穂（祝福の印）とするためじゃ。

わしの大切な兄弟よ、よう言うとくでえ。あんたらあ、聞くに早く、話すに遅く、ほいで怒るに遅くありんさい。人の怒りは神様の義しさ（ただしさ）を実現せんけえじゃ。ほいじゃけえ、あらゆる汚れや悪ときっぱり縁を切り、心に語りかける御言葉を素直に受け入れんさい。御言葉だけがあんたらの魂を救うことができる。

御言葉を実行せにゃあいけん。聞いとるだけなら、自分に嘘をついとるんとおんなじじゃ。御言葉を聞くだけで実行せんもんがおりゃあ、そんな（その人）は起きたままの顔を鏡に映して眺めとるようなもんじゃ。鏡に映った姿を眺めても、（なんにもせんと）立ち去り、きしゃなげな（汚い）ままで立ち去るんじゃ。ほいじゃが、自由をもたらす完全な教えをしっかり見つめ、これを守るとは、聞いて忘れるんじゃのうて、実行するもんじゃ。そうすりゃあ、実行することによって幸いになる。自分は信心深い思うとっても、舌を制することができず、自己評価を下げてしまうなら、そんなの信心は空っぽじゃあ。父なる神様に合格点をもらえる信心とは、この世の汚れに染まらず、困っとるみなしごや、やもめの世話をすることじゃ。

第2章

わしの兄弟よ、栄光の主イエス・キリスト様を信じとりながら、えこひいきしちゃあいけん。あんたらの集まりに、金の指輪をはめ、立派な身なりをした金持ちと、汚らしい身なりの貧乏人が入ってきたとしよう。金持ちには丁寧に対応し、「どうぞ特別席にお座り下さい」、と言い、貧乏人には「そこらに立っとるか、地べたに座りんさい」と言うたら、明らかにえこひいきしたことになる。その判断はまちごうとる（間違っている）。

わしの大切な兄弟たち、よう聞きんさい。神様は、この世の貧しいもんをあえて選び、信仰によって富ませ、御自身を愛するもんに約束された御国を受け継ぐもんとされたじゃないか。それなの

に、あんたらは、貧乏人を辱める。あんたらを不当に訴えてひどい目にあわせるんは、金持ち連中じゃないんか。金持ちは、あんたらに与えられとる（クリスチャンという）尊い名を、冒涜しとるじゃないか。あんたらが、聖書の言葉に従い「隣人を自分のように愛しなさい」という尊い律法を実行するのは実にすばらしいことじゃ。ほいじゃが、えこひいきするんなら、あんたらは罪を犯すことになり、律法によって裁かれる。律法全体を守っとっても、一カ所でも破ったら、全部を破ったことになる。「姦淫するな」と言われた方は「殺すな」とも言われた。ほいじゃけえ、姦淫しなくても、人殺しをすれば、あんたは律法の違反者になるんじゃ。自由の律法によって裁かれるもんとして、語り、また行いんさい。人に憐れみをかけんもんには、憐れみのない裁きが下される。憐れみは裁きにさえ打ち勝つんじゃ。

わしの兄弟よ、自分は信仰者じゃ言うもんでも、行いがなかったら、何の役にも立たん。そがいな信仰は、そんな（その人）を救うこたあできゃあせん。もし、あんたの知り合いが、着るもんがなく、その日の食べもんものなかったとしよう。そんならに、「安心しんさい、温もって、腹一杯食べんさい」言うだけで、実際なんもせんかったら、どうなろうか。信仰もおんなじじゃ。実際の行いがとものうてなかったら（伴ってなかったら）、その信仰は死んだも同然じゃ。「あんたは信仰の人、わしは行いの人」と言うて、（信仰と行いを分けて考える）もんがおる。行いのない信仰を見せてみんさい。ほいなら、わしは行いによって、わしの信仰を見せちゃろう。あんたは「神様は唯一だ」と信じとる。そりゃあ結構なことじゃ。悪霊どももそう信じて、震え上がっとる。なんも分かっとらんのう！行いのない信仰は何の役にも立たんのんじゃ。神様がわしらの父アブラハムを義しいとされたんは、息子イサクを祭壇の上に献げるという実際の行いがあったけえじゃないんか。アブラハムの信仰がその行いと共に働き、信仰が行いによって完成された。「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」いう聖書の言葉が（イサクを献げることによって）完成され、神様はアブラハムを友と呼ばれたんじゃ。これであんたらも分かるじゃろう。行いが伴ってこそ義しいと認められるで、信仰だけじゃない。（エリコの）遊女ラハブのおんなじじゃ。（イスラエル人の）スパイをかくまい、逃がしてやるという行いがあったけえ、救われたんじゃないか。魂のない肉体が死んだも同然であるように、行いのない信仰は死んだも同然じゃ。

第3章

わしの兄弟よ、教師になろう思いんさんな。わしら教師は、ほかのもんよりも厳しい裁きを受けることになるけえじゃ。わしらは皆、えっと（多く）過ちを犯してしまう。言葉で過ちを犯さんかったら、そんなは自分の全身を支配できる完璧な人じゃ。馬を御するにゃあ、轡（くつわ）をはめたら、全身を自由にいご（動）かすことができる。船を見てみい。なんぼ大きゅうて、風に押されとっても、船頭はこんまい（小さい）舵で思いのまま操る。おんなじように、舌はこんまい器官じゃが、大きなことを言うんじゃ。こんまい火が大きい森を燃やすじゃろう。舌は火なんじゃ。舌は「不義の世界」じゃ。わしらの体の器官の一つじゃが、全身を汚し、人生を台無しにし、自らも地獄の火で焼き尽くされる。すべての獣や鳥、また這うもの海の生き物は、人間によって支配されとるし、これまでも支配されてきた。ほいじゃが、舌を支配できるもんは一人もおらん。舌は、疲れを知らん悪の器官で、死の毒に満ちとる。わしらは舌で、父なる主を賛美し、また同じ舌で、神様に似せて造られた人間を呪う。同じ口から賛美と呪いが出て来るんじゃ。わしの兄弟たち、こんなことを許しとっちゃあいけん。一つの泉から、甘い水と苦い水が湧き出るじゃろうか？わしの兄弟よ、いちじくの木にオリーブの実がなり、ぶどうの木にいちじくの実がなるじゃろうか。死海から甘い水は取れん。

あんたらの中で、知恵のある、賢いもんは誰か？そんには（その人は）、知恵にふさわしい柔和な行いを、普段の生活を通して示しんさい。ほい

じゃが、心の中の妬みや自己中心の思いに負けて、自慢したり、真理に逆らうようなことを言うちゃあいけん。そがいな知恵は、上からのもんじゃのうて、下のもん、この世のもん、悪魔からのもんじゃ。妬みや自己中心のあると、秩序が壊れ、悪事がはびこる。上からの知恵は、純真で、温和で、寛容で、従順じゃ。憐れみと良い実に満ち、えこひいきも、偽善もない。義しい実は、平和を造り出すもんらによって、平和のうちに蒔かれる。

第4勝

どうしてあんたらの間で争いが起こるんな?あんたらの個人的な欲望が原因じゃないんか。あんたらは欲しがって手に入らんと人殺しをする。無理にでも自分のもんにしようと、争ったり戦ったりする。得られんのは主に願わんけえじゃ。ねごうても(願っても)与えられんのんは、自分のために使おうと、間違った動機で願い求めとるけえじゃ。節操がないのう!この世を愛するいうんは、神様の敵になるいうことを知らんのんか!この世に愛されたいと願うもんも、神様の敵になるんじゃ。聖書にこう書いてあるんは無意味じゃいうんか。

「神はわたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに深く愛しておられ、もっと豊かな恵みをくださる。」

さらにこう書いてある。

「神は、高慢な者を敵とし、謙遜な者には恵みをお与えになる。」

ほいじゃけえ、神様に従い、悪魔に対抗しんさい。そうすりゃあ、悪魔の方から逃げていかあ。神様に近づきんさい。そうすりゃあ、神様は近づいてくれんさる。罪びとよ、清い生活をしんさい。どっちつかずのもんよ、心を定めんさい。(自らの罪深さを顧みて、)悲しみ、嘆き、泣きんさい。笑いを悲しみに、喜びを愁いに変えんさい。主の前にへりくだりんさい。そうすりゃあ、主があんたを高めてくれてじゃ。

兄弟よ、悪口を言いおう(合う)ちゃあいけん。兄弟を悪う言うたり、兄弟を裁くもんは、律法を悪う言い、律法を裁くのとおんなじじゃ。律法を定め、裁きを行う方は、おひとりだけじゃ。この方だけが、救うことも裁くこともおできになる。隣人を裁くたあ(とは)、あんた一体何もんならあ!

よう聞きんさい。「どっかの町へ行って、一年かそこら滞在し、商売して一儲けしちゃろう」言うもんらよ。あんたらあ、自分の命がどうなるんか、明日のことすら分からんじゃないか。あんたらは、現れては消えてゆく霧のようなもんじゃ。あんたらはむしろ、「主が許されるんなら、生かされて、するべきことをしよう」と言うべきじゃ。ほいじゃなのに、あんたらは高ぶっとる。高慢はすべて悪じゃ。人が、なすべき善を知っとりながら、それを行わんかったら、そんな(その人)の罪じゃ。

第5章

よう聞きんさいよ、金持ち。降りかかってくる不幸を思うて、泣き叫びんさい。あんたらの富は朽ち果て、衣服は虫に食われ、金銀も錆つく。この錆こそが、あんたらの罪の証拠じゃ。あんたらの肉体を火のように食い尽くすじゃろう。終わりの時(終末)に宝を蓄えるとは何事か!見てみんさい。畑の借り入れをしたのに賃金をもらわんかった労働者の叫びが主に届いとる。あんたらは、地上で贅沢に暮らし、快楽にふけり、屠られる日に備えて、自分の心を太らせとる。(その上)無抵抗の正しいもんを罪に定めて殺した。

兄弟よ、主が来られるときまで忍耐しんさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るのを忍耐し、大地の尊い実りを待っとる。あんたらも我慢しんさい。気持ちをつよう(強く)持ちんさい。主が来られる時が迫っとる。兄弟よ、裁かれんためにはのう、不平を言わんことじゃ。裁く方が、はあ(すでに)戸口に立っとってじゃ。兄弟よ、主の御名によって語った預言者を見本にして耐え忍びんさい。耐え抜いたもんは幸いじゃ。あんたらは、ヨブの忍耐と、主が最後にどうされたか知っとろう。主は慈しみ深く、憐れみに満ちたお方じゃ。わしの

兄弟よ、とにかく、誓いを立てちゃあいけん。天を指しても、地を指しても、あるいは他のどんなもんを指しても誓うちゃあいけん。裁かれんためじゃ。あんたらは、「やることはやる」、「やらんことはやらん」とだけ言いんさい。

あんたらの中で苦しんどるもんは祈りんさい。喜んどるもんは賛美しんさい。病気のもんは、教会の長老を招き、オリーブ油を塗って、主の御名によって祈ってもらいんさい。信仰による祈りは、病人を癒し、主がそんなを（その人を）回復さしてくれてじゃ。もし罪を犯したんなら、主に赦してもらわにゃあいけん。ほいじゃけえ、主に癒してもらうために、罪を告白し合い、互いのために祈りんさい。義しいもんの祈りは、ものすごい力があり、効果があるんじゃ。エリヤは、わしらとおんなじ人間じゃが、雨が降らんように祈ったら、三年半地上に雨が降らんかった。ほいじゃが、再び祈ったら、天から雨が降り、地に実りをもたらした。

わしの兄弟よ、あんたらの中に真理から迷い出たもんがおって、誰かがそんなを真理に連れ戻すことができたら、罪人を迷いの道から連れ戻すもんは、その罪人の魂を死から救い出し、多くの罪を覆うことになると知っときんさい。